「関西女性作家を読む会」

吉川佳英子

開催日：11月23日（金）14～16時30分
発表者：村田京子「マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモール『ある画家のアトリエ』における女性画家像」
場所：大阪府立大学なかもずキャンパスA 15棟3階　演習室324

マルスリーヌ・デボルド＝ヴァルモール Marceline Desbordes Valmore（1786－1859）は、ジョルジュ・サンドより18年早くこの世に生を受けた19世紀ロマン主義時代に詩人として生きた女性で、恋愛の悲しみを歌ったエレジーなど、愛の詩を数多く著した。処女詩集は「エレジーとロマンス」（1819）。

作家バルザックや批評家サント＝ブーヴに高く評価されたが、世間一般によく知られていたわけではなかったようだ。彼女の死後、詩人ボードレールに発見され、有名となった。「女の手紙」は、ヴェルレーヌに最も優れた作品と評価されている（『呪われた詩人たち』）。デボルド＝ヴァルモールは、当時の女性作家たちが「ブルーストッキング」と呼ばれて男性作家の批判の対象となったのとは対照的に、多くの男性詩人に「偉大な詩人」として高く評価された。

詩の他にも、1821年の中編小説『アンティル諸島の通夜』など、クレオールを題材とした作品も残している。また、彼女は女優の卵としてリールの劇団の舞台にも立った。

1832年からは演劇活動を停止し、書くことに専念。叙情性に富む作風と大胆な表現は注目を集め、いくつかの賞も受賞した。子ども向けのコントも手がけている。そんななかで、サンドとも親しかったアンリ・ラトゥーシュとの間には子供をもうけている。その後の結婚でもうけた4人の子供や、唯一の弟、友人達すべてに先立たれた後、1859年に逝去。

村田京子氏は、今回、これまで あまり取り上げられてこなかった彼女の小説に焦点を当てた。1833年に出版された『ある画家のアトリエ』は彼女の最高作とみなされ、副題には「私生活情景」というタイトルがついている。これはバルザックの『私生活情景』を連想させる。従って画家を扱ったバルザックの同時期の作品と比較することは有意義なことである。

まずバルザックの『ラ・ヴェンデッタ』におけるアトリエの描写の検証、次いでデボルド＝ヴァルモールの『ある画家のアトリエ』におけるアトリエの検証と比較、さらには『ある画家のアトリエ』の主人公である女性画家オンディーヌを取り上げるとともに、彼女が理想の女性画家としてかかげたオルタンス・レスコーにも言及した。

発表ではアトリエ風景の画像や、女性画家の自画像などが豊富に紹介されるとともに、英米の批評を視野に収めつつ、ジェンダーの観点から斬新に分析が試みられた。デボルド＝ヴァルモールの詩のテクストの分析も試みられ、ラ・マルチーヌと交わした詩のテクストの分析は具体的であり、彼女の作風、また当時の女性詩人の受容の様子もうかがうことができた。発表後の質疑応答は活発で、研究会参加者たちのこの分野における関心の高さも実感できた。美術と文学の交錯する地点へのジェンダーという視点からのアプローチは、今後さらに幅広く展開されるとのことで、大いに楽しみである。